

# 漫画に見る在外日本人 —アジア・アフリカ・BRICsの眼差しから—

小林英夫<sup>†</sup>

## The Overseas Japanese from Comic Books —Looking from African, Asian, and BRICs' Perspectives—

Hideo Kobayashi

Nowadays the Japanese cartoons have been well-known in every parts of the world. These Japanese cartoon books significantly carry the unique Japanese cultures and Japanese-stereotypes characteristics to the people of the world undoubtedly. In this research, I would like to conduct the studies on the Overseas Japanese behaviors and ideas by uses of the facts and opinions appearing on the cartoon books. In this paper, three kinds of the Overseas Japanese groups were classified and studied—Big companies' workers, SMC companies' workers, and rootless persons. The differences of behaviors and characteristics among these three types which are employees of big, small and rootless company would depend on differences of the Japanese management systems, which were applied in different types of the companies. In order to answer precisely the research question, I selected cartoons from four comic writers (Kenzi Hirogane, Hiroshi Motomiya, Yutaka Kamoshida, and Rieko Saibara) to represent and make studies on each type of mentioned groups of the Overseas Japanese people.

### はじめに

現在海外にいる日本人数は、「長期滞在者」、「永住者」を含めておよそ 100 万人。そのうち最大の居住地域はアメリカでその数約 33 万人、それに次ぐのは中国の約 10 万人で第 3 位はブラジルの約 7 万人である。4 位以下は 5 万人未満で、韓国、台湾、タイといったアジアの国々がその名を連ねる。しかし最近では中国在住者の数が急増してきていて、やがてはアメリカを抜く日もそう遠くはないだろうと予想される。だから、この順位は、そのまま日本との政治・経済・外交・文化関係の反映で、かつては日米関係が、現在は日中関係が日米のそれを追い上げる形になっていることの反映なのである。

しかし同じ海外在住者数といっても、隣国中国がアメリカに約 300 万人、同じく韓国が約 150 万人を送りだしているのと比較すると日本の海外居住者の数は中国の約 10 分の 1、韓国の約 5 分の 1 で、その数がいかに少ないかわかるだろう。内向きの日本人と言われるわけがこうした海外居住者の少なさにも現れているといえよう。

しかし、だからといって日本人の性向が、元来内向きなのだと即断することは出来ない。なぜなら今から半世紀前の 1945 年 8 月までは、「大東亜共栄圏」と呼称された東アジアの日本帝国支配地域に約

<sup>†</sup> 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

340万人の日本人が住んでいたし、これに軍人を加えると約700万人前後と当時の日本の総人口の1割近い日本人がこの地域に生活していたのである。そうした過去を持っているだけではなく、現在でも数としては多くはないが、日本を飛び出し単身で異国の地を闊歩している冒険好きの若者や現地の異性と結婚し当地で根を下ろして生活している日本人、退職金を基に老後の生活を異国の地で過ごすシニア世代も少なくないのである。

そうした現状で日本人海外在住者を目的別に見ると、最大の勢力はビジネスマンで、企業からの派遣者が全体の80%近くを占める。輸出志向で戦後の経済成長を突き進んだ日本にふさわしく在外日本人の主力はビジネスマンなのである。

ところで、このビジネスマンは海外でどのような生活をしているのか。2008年3月海外日本人団体の動向をテーマにした著作を上梓した小林英夫<sup>(1)</sup>は、その結論部分で在外日本人ビジネスマンを以下の3つの類型に分類した。①「大企業派」②「中小企業派」もしくは「転職派」③「さすらい派」がそれらである。この分類は、筆者の突飛な発想というわけではなく、呼称はともあれ、①、②に関しては矢野暢<sup>(2)</sup>が、③に関しては赤木攻<sup>(3)</sup>が言及している。しかし、これらを真正面から取り上げ優れた作品を残しているのは、矢野や赤木を別とすればいわゆる「学者たち」ではなく、弘兼憲史、本宮ひろ志、西原理恵子といった漫画家たちである。とりわけビジュアルなかたちで表現している作品となると彼らの右に出る者は少ない。

本稿は、漫画家の作品を通じて、海外で生活する日本人の過去、そして現在の生態とその特徴に迫ることとしたい。海外といっても世界各国というわけにはいかない。ここでは、これから21世紀に日本が正面から向き合わざるを得ないアジア、アフリカ、BRICsの国々を中心にその姿を見てみることにしよう。

## 1 海外日本人の3類型と3パターンの漫画

### 1-1 海外日本人の3類型

海外日本人を強いて分類すれば、以下の3つの類型に分けることが可能となる。それらは、①「大企業派」、②「中小企業派」もしくは「転職派」③そして「さすらい派」である。

「大企業派」とは、いうまでもなく大企業から派遣されるエリート・サラリーマンで、海外勤務地でも日本人エリート階層を形成し高級住宅地に住み、数名のメイドを雇い、運転手付きの社用車で自宅と会社を行き来し、妻子とともに優雅な生活を享受し、数年にして日本へ栄転・帰国する面々である。彼らは、現地の日本人会や日本人商工会議所、日本人学校の運営メンバーとなり、そこで指導的幹部となり、その妻の多くは家事労働をメイドに委ね、現地日本人社交界のメンバーとして活動する傍ら趣味に時間を注ぐ。

「中小企業派」「転職派」とは、中小企業から派遣されるか、さもなければ脱サラして現地で個人企業を営む日本人である。彼らは現地庶民が暮らす居住区域に住み、独身もしくは現地人の妻と結婚もしくは同棲し、現地に溶け込んだ生活を送る階層である。日本に戻る可能性は少ない。日本人会、日本人商工会議所、日本人学校の運営に参加するものは少数で、参加しても「大企業派」とはそりが合わず、相

互に交流することが少ない代わりに、現地社会とは緊密な関係を持ち、現地人との接触は多い。また彼らのなかには日本人会とは別の組織を作って活動している者もいる。典型例はフィリピンのマニラ会で、大企業中心のマニラ日本人会とは別に中小企業や定住者を中心に団体活動を行っている。

最近増え始めたのが3番目の「さすらい派」である。彼らは、明確な目的もないままに遊びに来てそのまま逗留し、日本企業に現地採用されて生活する若者たちである。定年退職後の生活をゆったりとすごすために逗留し、老後生活を送るシニア層も広い意味でこの集団に含まれる。彼らは、日本人会や日本人商工会議所に結集せず、日本人社会に接触面を持たず、さりとて現地社会ともさほどの強い結び付きも持たないままに浮遊し続ける集団である。

### 1-2 3 パターンの漫画

漫画に焦点を当てた場合、①の「大企業派」の動きを漫画の世界で代表するのは弘兼憲史『島耕作』シリーズであろう<sup>(4)</sup>。大企業の初芝社員として課長から部長、取締役、常務、専務として出世していく過程で、彼は海外に出向、活躍する。海外での生活は、まさに「大企業派」のそれである（もっとも島耕作は離婚しているので妻子同伴ではないが）。

②の「中小企業派」もしくは「転職派」のそれに焦点を当てた漫画としては、本宮ひろ志『サラリーマン金太郎』がある<sup>(5)</sup>。元暴走族、ヤマト建設入社、建設業界中堅としてアフリカでの建設事業を行う金太郎出世物語である。

③の「さすらい派」を描いたマンガは、鴨志田穰・西原理恵子『鳥頭紀行』シリーズ『アジアパー伝』をもって代表されよう（残念なことに鴨志田穰は2007年逝去したため、今は西原理恵子が孤軍奮闘しているが<sup>(6)</sup>。「比較的責任感をもってさまよえる日本人」現代バージョンとでもいえるこの漫画の登場人物（作者本人）は、世界の隅々、地球の果てで、やじきた道中を繰り返す。ブラジル・アマゾンの旅、ミャンマー僧侶体験、ベトナム、台湾体験など。単なる通り一遍の観光旅行ではない。現地社会に足を踏み込みながら、しかし深く入ることなく軽やかに通過していく。そこに現れる日本人は、ある場合にはビジネスと僅かに関係し、またある場合にはビジネスと縁もゆかりもない浮遊人の生活そのものなのである。



図1 弘兼憲史『課長島耕作』（講談社漫画文庫、1994年）

## 2 島耕作の世界

### 2-1 島耕作の経歴

「大企業派」の日本人海外駐在員の姿を描いたマンガで近年ヒットしたものに弘兼憲史『島耕作』シリーズがある（図1表紙参照）。「出世双六もどき」と言ってしまうばそれまでだが、とまれ、まず主人公の島耕作の経歴を簡単に跡づけておこう（表1参照）。

島耕作は1947年9月山口県岩国市に生まれている。団塊の世代、60年代後半の大学全共闘世代として70年3月に早稲田大学法学部卒業と同時に4月初芝電器に入社している。ちなみに弘兼憲史も同年早大法学部を卒業、松下電器に入社しており、その意味では

小林 英夫

表1 島耕作プロフィール

---

1947. 9月9日	山口県岩国市に生まれる
1970. 3月	早稲田大学法学部卒業
1970. 4月	初芝電器産業株式会社 入社
1970. 11月	本社営業本部 販売助成部屋外広告課配属
1971. 11月	本社営業本部 販売助成部製作課配属
1976. 1月	本社営業本部 販売助成部製作課主任に昇進
1983. 5月	本社営業本部 販売助成部宣伝課 係長から課長に昇進
1985. 1月	ハツシバアメリカ N.Y. 支社宣伝部配属
1986. 1月	本社営業本部 販売助成部宣伝課配属
1987. 5月	初芝電産電熱器事業部 営業部宣伝助成課配属
1988. 5月	本社営業本部 販売助成部ショールーム課配属
1990. 5月	フィリピン・ハツシバにマーケティングアドバイザーとして配属
1990. 11月	本社営業本部 販売助成部総合宣伝課配属
1992. 2月	総合宣伝課が社長直属の部署・総合宣伝部に それに伴い総合宣伝部部長に昇進
1999. 1月	初芝電産貿易株式会社に代表取締役専務として出向
1999. 9月	サンライトレコード株式会社に代表取締役専務として出向
2001. 4月	本社市場調査室配属
2001. 5月	福岡ハツシバ販売センターに代表取締役専務として出向
2001. 10月	福岡ハツシバ販売センター 代表取締役社長に就任
2002. 2月	本社取締役役に就任
2002. 6月	上海地区担当役員に就任 上海初芝に董事長として赴任
2005. 2月	本社常務取締役役に就任 中国全土の担当となる
2006. 11月	本社専務取締役役に就任 中国, インド, 北米の担当となる
2008. 5月	初芝五洋ホールディングス社長に就任

---

弘兼憲史『専務島耕作』講談社, 2008年6月.

主人公の島耕作と二重写しとなる。もっとも弘兼は入社3年で退職、漫画家の道を歩むのに対して、主人公はその後同社販売助成部にあって83年5月課長に昇進していくから、自ら果たせなかった大手企業サラリーマン出世街道を島に託したかたちとなる。弘兼は、自らを「団塊の世代と位置づけ、その生き様を描きたかった」<sup>(7)</sup>と語っているが、確かに随所に「団塊」「全共闘」という熱くそして重い世代用語が飛び出してくる。

島は85年1月にはアメリカ・ハツシバ・ニューヨーク支店勤務。1年後には本社営業本部に戻る。90年5月にはフィリピン・ハツシバに配属され、半年後には本社営業本部へ戻り92年2月には営業本部総合宣伝部部長に昇進する。その後国内での各部署を経験して2002年2月には本社取締役となり上海初芝の董事長となる。そこで2年半勤務した後本社常務取締役役に就任、中国全土の担当となる。その後インドでのビジネスの最先端に立ったあと08年5月初芝五洋ホールディングス社長に就任している。

この間、学生時代の大学紛争、その後の結婚と離婚、さらには恋人との出会いやもつれで話は進むが、こうした個人的出来事はともかく、彼の歩んだ初芝でのビジネス経緯は、日本企業の海外展開そのものである。彼がアメリカ・ハツシバ・ニューヨーク支店に勤務した1985年9月にはプラザ合意に基き円高が始まり、国内ではバブル経済が、海外では日本企業の進出ラッシュが始まっている。北米進出はその典型であった。90年代初頭のフィリピン行きは、日本が家電を中心に東南アジア投資を増加させた時



期に該当する。その後90年代後半から2000年代初頭にかけて対中国投資が急増するが、まさにそのさなかの02年に彼は上海初芝の董事長として中国へ赴任する。そして05年からインドを含むBRICsが新興市場として脚光を浴びると彼はその活躍の場をインドへとシフトさせるのである。このように見ると彼の海外生活の経歴が、当時の日本経済の動きそのものだったことがわかる。

## 2-2 島耕作の交友関係

彼の交友関係は、総て職場との関連で形成された人間関係で、職場以外は皆無に近い。だから人間関係の総てが上司か部下、そして同僚なのである。しかも彼自身が無趣味の仕事人間だから、趣味の世界に交友関係が拡大することもない。では家庭を大切にするかといえば、逆で、クリスマスの晩に妻と一人娘が彼の帰りを待って夕餉を楽しもうというときにも、彼はあえて同僚と屋台で飲み明かし妻と娘が寝静まった深夜に帰宅するのである。実際彼の行動を見ていると「家族に好かれる人」といった感覚はない。職場が総てであり、24時間はそのために当てられるのである。「亭主元気で留守が良い」という生活観で割り切れる妻であれば、大企業の高収入が彼女に保障され、しかも夫とは相対的に別な「自由」な時間が保持されるわけだから、万事ハッピーと丸く収まるのだが〈また多くの日本の大企業勤務の夫をもつ妻は、それで諦めながらも「満足」するのだが〉、島の妻はそうした夫が許せないままに離婚の道を選択する。もっとも「子供の教育以外に関心がなく、島の仕事にも特段関心を持たない」彼の妻は、離婚を決意する段階で、雑誌編集者として自立する方向へと歩を踏み出すので、結婚後に彼女自身も変化していった、と見るべきなのだろうが…〈論文とは違い、漫画の世界ではその辺の説明が明確ではない〉。

他方島は、妻と離婚する前に、すでに華やかな女性遍歴を繰り広げている。その相手は、行き付けのバーのマダムだったり、上司の愛人だったり…。実は、その女性遍歴の多さと彼女らとの交際場面の描写がこの漫画のストーリーのもう一つの筋をなすのだが、この点は本論文の主題ではないので割愛する。ただ、ここで言いたいのは、こうした女性遍歴そのものも彼の場合には、職場との関連で生まれ、そして消えていくものだという点である。別れた妻の交際相手が、彼の取引先の部長であるというシナリオなのだから、その筋書きの徹底振りはずさまじい。

## 2-3 派閥

だから、彼の関心事は社内の人間関係である。初芝には宇佐美専務派と大泉専務派が対立している。宇佐美はたたき上げの代表で初芝を世界の榎舞台へ押し上げた実力者である。他方大泉は東大法学部卒、四井銀行を経て初芝に入り吉原会長の娘婿として次期社長の座をねらっている。島はそのどちらの派閥にも属してはいない。島がアメリカから帰国した1986年に彼は宇佐美派から帰国報告と称して赤坂の料亭にお誘いを受けている。彼はアメリカ・ハツシバでは社長の大泉を上司に、帰国後は宇佐美専務派に属する福田部長、検見川次長の下で働くという厳しいポジションにあるのだ。彼が赤坂の料亭で宇佐美派から求められたのはアメリカでの大泉に関するスキャンダル情報であり、逆に大泉から帰国後の仕事として依頼された頼みごとは、銀座のバー「クレオパトラ」の典子の世話である。

しかしこの勝負は、初芝会長の吉原の死をもって急展開を遂げる。吉原の急死で、現社長の木野穰が昇格し、新しい社長には副社長の一人の苦米地功が就任、残りのもう一つの副社長ポストを宇佐美、大

泉が争うこととなるからだ。この大勝負、大泉が競り勝って副社長の座を射止める。この結果、宇佐美派は一掃され宇佐美自身は関西の電熱器事業部長として都落ち、その後癌に侵された体は回復することなく死去する。近親の者だけのひっそりした葬儀で世界の初芝を揺籃期から育てた功労者にしては寂しすぎる最後だったという。

立場を鮮明にしていなかった島は、アメリカから帰国後は京都の初芝電熱器事業部に席を置いていたが、先の「政変」で大泉派が勝利すると本社に戻されることとなる。彼の所属する販売助成部は、島を除くと主要ポストは大泉派で固められている。この初芝内での派閥の話はその後副社長に就任した大泉と苔米地功との間で社長ポストをめぐる厳しい戦いが続く。文字通り会社の間関係は派閥に凝集されているからだ。が、ここではこの話はひとまず中断して本題である島の海外生活に目を移すこととしよう。

## 2-4 島耕作の海外活動

### 2-4-1 アメリカ・ハツシバ

島耕作の海外生活は、アメリカを振り出しにフィリピン、タイ、中国、ベトナム、インドと広範な範囲におよぶ。彼は、どの国でも単身赴任で妻子と海外で過ごした経験はない。理由は、妻の同意が得られないからである。彼が最初の海外赴任地であるアメリカ・ハツシバ・ニューヨーク支店に出張するとき、彼は妻に同行を提案するが、子供の受験を理由に断られており、以降は総て単身赴任となっているのだ。しかしこのアメリカ行きは別居が双方の不信を生んで、結局離婚への道を進むこととなる。しかしこのことはある程度予想できたことで、彼が妻との離婚の危機を防ごうとすれば、もっと熱心に彼女のアメリカ同行を説得すべきであったろうが、そうした努力をした形跡はないのだ。

### 2-4-2 フィリピン・ハツシバ

島がフィリピン・ハツシバに赴任したのは90年5月のことだ。大泉と苔米地功が社長ポストをめぐる厳しい戦いを展開し大泉が勝利して社長ポストに就いた直後のことである。いわば広い意味での論功行賞の一環といえよう。むろん離婚後だから単身赴任である。ハツシバのオフィスビルがあるのはマニラのマカティ地区、大企業の本社がオフィスを構える一等地である。フィリピン・ハツシバの資本金は公称、払込ともに不明であるが、フィリピンの財閥カルロス・メンドーサと合弁で家電生産工場と販売会社を経営している。持株比率は工場がハツシバ52%、メンドーサ40%、その他8%でハツシバがマジョリティを持っているが、販売会社のほうはメンドーサ55%、ハツシバ30%、その他15%で逆にメンドーサがマジョリティを確保している。日本人出向者は初芝電産海外事業部長兼フィリピン出向責任者の戸倉周太郎を筆頭に工場には約30人、販売会社には4名が配置されている。現地従業員は工場が1500人、販売会社が300人。製造品目はテレビ、ステレオ、カラオケ、エアコン、洗濯機、扇風機などいわゆる「白物家電品」である。工場はマニラから車で40分の郊外に在り、販売会社はマニラ市内20分のところにある。工場の日本人出向者だが、従業員1500人に対して日本人出向者30人というのは小林英夫の1990年代初頭のフィリピン日系企業現地調査報告<sup>⑧</sup>からすると多すぎるように思う。立上げの時期ならいざ知らず、生産が軌道に乗っているが日本人出向者が全従業員の2%を占めるとい

うのは異常で、この程度の工場なら通常日本人出向者3名内外でこなしていかなければ採算が取れないはずである。その意味では経営努力が必要な問題会社だともいえよう。

島は販売会社への出向者としてフィリピンに赴任しているので、給与はメンドーサ側から支払われる。この販売会社の社長は初芝同期の樫村で、彼は樫村の下でナンバー2のマーケティング・アドバイザーのポジションに就くこととなる。

経営はまったくの日本式だ。朝礼から始まり故吉原会長の社訓を英語で唱和し、社歌を歌い就業する。就業時間は午前7時30分始業で午後5時20分に終る。昼休み50分を含めて実働9時間である。5S（整理・整頓・清潔・清掃・躰）はおろかQCサークル活動もばっちりを実施していたのだと推察される。しかし小林英夫の調査<sup>9)</sup>では、この程度はほぼどの工場でも常識的に行われていた年中行事の一つである。

ところで、彼の住居だが、当初は独身用のコンドミニウムに住んでいた。しかしそこで殺人事件がおきたこともあり、彼は樫村が住むヴィレッジに移転することとなる。ヴィレッジというのは、マニラの高級住宅地域で、その一角は、完全に他と隔離され、門衛がいて安全を確保し、特別の許可がない限り他者は入ることは出来ない。日本で言えば米軍基地を想定していただければ当たらずとも遠からず、であろう。樫村は、ここで運転手2人にメイド2人の合計4人に傳かれて生活している。

島や樫村の休日の息抜きはゴルフである。もっとも樫村の妻は休日ゴルフを気持ちよく思っておらず、しかも樫村の高校生の息子もゴルフをやり勉強に励まないのを不満に感じているので、これが夫婦揉め事の原因となっている。勤務後の息抜きといえば、後はお定まりの日本料理屋かクラブかカラオケということになる。ここでも日本人同士の付き合いが繰り広げられるのである。

### 2-4-3 上海初芝電産有限公司

島が再度海外に出るのは2002年6月のことで、行き先は中国商戦の最前線、激戦地の上海だった。彼はこの年の2月に取締役就任し、上海初芝電産の董事長となるからである。上海初芝電産は中国の投資集団との合併で、その傘下には電子レンジを生産する上海初芝電産微波炉有限公司を筆頭にステレオ生産工場など合計13の事業所を包み込んでいる。彼は、この事業所の董事もかねているため各董事会に出席せねばならず、超多忙を極めていた。彼が董事長を務める上海初芝電産の董事会は、2名の董事と総経理・副総経理をくわえた7名から構成されている。日中の構成比率は、日本側が3名、中国側が4名で、日本側は董事長、総経理、副総経理を、中国側が董事2名と副総経理2名を出しているのである。

しかし上海初芝電産が抱えた最大の問題は、初芝製品が中国市場で、欧米に加えて韓国や中国ローカル企業との競争に敗退しているという現実である。その理由は、初芝製品は、競争他社製品と比較して品質は同等なのに価格が高くブランド力も低いからである。この状況を打破する道は、日本から曳いてきている部品を現地化することでコストダウンを図るか、思い切って生産を現地企業に任せて高付加価値製品の供給で稼ぐか、日本側は開発に力点を置いて棲み分けを図るか、しかないのである。最初に初芝が選択した道は、中国家電メーカーの大手3社に入る出発集団との日中両市場での販売網利用であった。しかし初芝製品が、ローカル製品より3割から5割高いことがわかると島は思い切った部品の現地化に踏み切る。換言すれば中国に進出している日系ベンダー（下請け部品会社）の切り捨てである。べ

ンダーのなかには経営不振で自殺者も出る。しかし情を残しては出来ない作業を島は敢然と実施する。そのあとさらに島が行ったことは、出発集団へのデバイスの供給だった<sup>(10)</sup>。出発集団のテレビやコンピュータが売れば売れるほど初芝のデバイス供給は増えるという寸法である。だが、この結果技術移転が急速に進むとあれば、日本国内の産業空洞化を生み出すわけで<sup>(11)</sup>、企業にとって、これはある意味で1つの賭けである。

島は2005年2月本社常務取締役役に就任し、中国全土の担当となる。直面した問題は労使紛争である。初芝冷機有限公司でも上海洗濯機工場でも争議が起きている。中国での労務問題は、この数年深刻度を増してきている。労働市場もこれまでの買手市場から売手市場へと転換を開始してきているのだ。2008年に入り物価上昇も著しく、それにあわせて賃金アップの要求も強まっている<sup>(12)</sup>。島もこうした新しい課題に取り組みは始めているのだ。

#### 2-4-4 インド出張

島は2006年からインドへのお出張を繰り返している。インドにはデリーにハツシバ・インディアが操業しているのだが、彼はバンガロールを始め各地を視察してインド市場を研究している。まさにBRICsの動向を経営者の視点から監察している、というところだろう。ここで彼は、日本よりも後発グループであるにもかかわらず急速にそのシェアを伸ばしている韓国企業に着目する。韓国PG社とソムサム社が家電市場を完全に押さえているのである。カラーテレビ、薄型カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機、電子レンジなど、いずれもPG社がトップをソムサム社が第2位でこれを追い、韓国企業2社で50%のシェアを占めているのである。両者がインド市場を席卷した理由は、徹底した現地化である。現地の安い部品を使って廉価な製品作りに努力したということである。しかも最先端の技術を使った最新の製品を現地開発で投入したということである。日本企業のように旧型の製品を日本からの高い部品で作り高価な製品を売り出すのとはまったく正反対である。くわえてブランドを確立するために日本企業の10倍の宣伝広告費をつぎ込んだことである。なにもかも日本とは異なる戦術を使い、膨大な市場を一挙に制覇するという、韓国の戦略は、島をして驚愕させるものがあったといえよう。

#### 2-4-5 島の海外生活

しかし不思議なことにこの漫画には現地日本人社会は登場しない。アメリカにあってもフィリピンにあっても、そして中国、インドでも彼のビジネス活動の舞台は、現地の会社の面々であり、その社員が愛用するアフター・ファイブ以降の日本人の飲み屋やカラオケ、そして日本人幹部が屯すホテルを主体にしたエリート駐在員社会なのである。フィリピンで日系企業幹部の奥様方の集まりが描かれているが、明日のパーティにどんな服装をしていくかといった現地社会とは遊離した奥方達の戯言描写である。現地社会との関連で島が他の日本人駐在員と異なるのは、現地の屋台の食事を厭わずに口にす「風変わりな日本人社員」というイメージを保持している点である。しかし島はそれ以上の現地社会への踏み込みはしないのだ。

実は、現地社会には、こうした駐在員社会と定着者社会があり、両者は目に見えない境界線で仕切られたかのように交わらず、水と油のように分離されているのである。むろん両者には接触面が無いわけではないが、それは皮一枚の薄さだけで接触しているのであって、交じり合う関係ではない。島耕作が、

社内でトップに行けば行くほど、駐在員社会だけに閉じこもり、定着者社会との接触面は薄れていくのである。そう考えると島耕作の世界に日本人定着者社会が描かれないのは、むしろ自然なことだと考えることも可能である。

### 3 『サラリーマン金太郎』の世界

#### 3-1 金太郎の経歴



図2 本宮ひろ志『サラリーマン金太郎』(集英社文庫、1994年～2002年)

次に登場を願うのはサラリーマン金太郎(本名矢島金太郎だが以下金太郎と省略)である(図2表紙参照)。金太郎が勤めるヤマト建設は、住宅建設業界ではトップ3にランクされるが、島耕作の初芝のような世界に冠たる大企業ではないし、業種も電機業界ではなく建設業界で、業界では中小企業上位企業といったところか。ここにかつて暴走族八州連合を束ねていた金太郎が若くして結婚、死別した妻が残した子供をかかえて子連れ就職をする。かつて釣に出て漂流し生死をさまよったヤマト建設会長を命がけで救った恩義で金太郎も仮採用で就職できたというわけである。履歴書には1991年5月とあるからバブル崩壊直後のことである。当の会社は、創業者のヤマト会長派と建設省天下りの大島社長派が抗争し、大島派が優勢のうちことが運んでいる。しかし金銭スキャンダルをきっかけに取締役会で生え抜きの会長派が勝利し金太郎は晴れて正社員となる。その後日く付きの荒船山トンネル工事をなし終え、東北支社副

支社長に昇進、その後東京に戻った金太郎は、アフリカのナビリアに派遣されマイクロエーブ送信局建設事業に従事、政権交代を生む内乱に直面、成果をあげられぬままに帰国、営業第二課主任となる。その後金太郎はクラブママの末永美鈴と再婚する。不況に苦しむ建設業界で、子会社へ出向した金太郎はナビリア時代の旧友とめぐり合い親交を深める。本社に戻った金太郎は、組合の委員長に推され就任する。そこで会社がひそかに進めたリストラ案を吞まず会社と全面対決の道を選択した金太郎は、リストラ要員を集めて別会社を設立、社長に納まる。この新会社はヤマト建設に吸収合併されるが、金太郎は社長室長となる。その後社内で総選挙の手伝い、ニューヨーク・モーガン大ビジネススクールへの留学などを繰り返し、サラリーマン稼業を続ける…。

#### 3-2 金太郎の交友関係

金太郎の交友関係は実に広い。出身が暴走族のためか、その筋の連中がしばしば登場するというのも中小企業の建設関連企業ならではの話かもしれない。喧嘩と殴り合いが場面場面の展開を区切り、警察が登場し逮捕、収監が場面を飾るのもこの漫画の1つの特徴だろう。建設業界の荒々しさを象徴しているとも言える。支社や子会社出向に始まり再就職を目指すアメリカ留学など、多彩なキャリアも大企業とは異なる中小企業の社員の特徴を示しているといえよう。だから金太郎の場合は、島のように交友関係が会社関連だけとは限らない。むしろ、社内の人間関係よりは、社外の人間関係の方が動きの中心を

構成する仕組みになっているのだ。労働組合が出てくるというのもこの漫画の特徴で、島の漫画には出てきても、それは主役の島とは係わり合いのないところで登場してくるのである。しかしこの労働組合もまた決定的なところで折り合うという筋書きになっている。

### 3-3 派閥

逆に社内派閥と言う点では、大企業の初芝も中小企業のヤマト建設も同じである。この点は電機業界も建設業界も違いはない。強いて違いを言えば、建設業界では、「生え抜き派」と建設省からの「天下り派」の系脈の違いが厳しい対決をすることとなる。たしかにヤマト建設でも東大出身で建設省を経てヤマト建設入りをし、社長の座についた大島源造の力があればこそ、この会社は受注高の60%を公共事業が占める事で急成長を遂げることが出来た。反面それまでの生え抜きは、閑職へと追いやられ、職場はかつての明るさや笑いを失っていった。しかしこの営業実績ゆえ27人の執行役員中会長の大和守之介派はわずかに1名で、残り26人は大島派で固められることとなったのである。

この派閥戦争は前述したとおり、大島の株買占めの金銭スキャンダルと重なって、取締役会で会長派が勝利して、大島派は敗退するのだが、こうした派閥は、その後もこの会社のトップを巡る人事のなかに現れるのである。

### 3-4 金太郎の海外活動

#### 3-4-1 アフリカでの土木事業

漫画の舞台もアフリカの辺境のサハラ砂漠の国ナビリアである。金太郎の会社ヤマト建設は、いわゆるゼネコンではなく、中小企業だ。したがって、当然のことながらこの業界では二流どころということになる。工事内容は、砂漠のなかにバラボラアンテナ用の鉄塔を立てる基礎工事と通信機材、発電機そして常駐してメンテナンスをする要員の生活スペース用の隣接建屋を67箇所建設するというものである。しかも1人が5~6箇所担当して一挙に完成させたい、という強行スケジュールなのだ。発注者は大手電機メーカーのDECでプロジェクトディレクターは商社の東紅が担当している。くわえてDECはナビリア準国営のアル・シーク社と建設部門の下請契約を結んでおり、ヤマト建設はアル・シーク社と共同作業を行うことを余儀なくされるというややこしきさである。だから金太郎が勤めるヤマト建設は、DECの命を受けてアル・シール社と歩調をあわせなければならない運命にある。

ところがDEC社員の本多はヤマト建設の金太郎たちを信用しない。二流企業では砂漠の自然環境の厳しさとイスラムの異文化の壁に耐えられず、今にケツを割って逃げだすだろうと踏んでいるから、おのずと対応は横柄でぞんざいになる。くわえて相棒の現地企業のアル・シーク社の社長アブ・ラル・マジットはといえば、初対面から土産に社員がはめていたローレックスの時計を要求するなど、これまた食えない態度をとる。こうした「地獄」の関門を幾つか越えてなんだかんだで、ごたごたしながらも事業はスタートする。金太郎も分担仕事にかかるが、工事現場に行ってみると労務者も機械も技術者もない。しかも食糧も水もない。早速アル・シーク社と掛け合うが、ラマダンの最中とあっては、何もかも動かない。そこで一計案じた金太郎は、アル・シーク社の社長の前で、彼の用心棒との決闘に出て空手・柔道を駆使して相手を圧倒、力づくで社長に要求を飲ませ現場に労務者と物資を送らせ作業にかかる。普通の日本人では、ラマダンの一言で引込むところが、元暴走族の金太郎はもち前の腕力でそこ



を強行突破するのだ。

しかし突破できないのが砂漠の砂嵐である。どんな建築中の建物でも破壊し砂のなかに埋めつくす。その掘り起こし作業の最中にまた難問が浮き上がる。それはここ3ヶ月アル・シーク社が労働者に給料を未払いだったことが発覚するのだ。現場の労働者はいっせいに職場放棄、現場を引揚げる危機に直面する。金太郎危うし。しかし本社の弦本の好意によって3000万円の現金を手に入れた金太郎らは労働者を再募集し突貫工事を展開、あらかたの工事を完成させる。そんな折ナブリア内でアズラク族の反乱が勃発、せっかく作り上げた鉄塔と建屋は内戦の戦火の中で破壊されてしまう。さらに反乱軍に包囲され、殺されかかると、金太郎の従者の中にアズラク族出身者がいて身を挺して金太郎を守ったため、かろうじて助かり、這う這うの体でナブリア国を脱出、金太郎一行は日本帰国の途に就くのである。

### 3-4-2 アフリカでの生活

話は海外の土木事業物語だが、業種も関連しているのだろうが、島耕作バリのリアリティは乏しい。舞台がアフリカのサハラ砂漠という設定がそうしたイメージを生むのか、そもそも『サラリーマン金太郎』シリーズが海外事業をさほど重視していないためにやや荒い筋書きになったのか、その辺は定かではない。しかし、欧米企業との葛藤や現地でのビジネスマンの生態、労使関係の日・欧米比較など、島耕作を紹介したときのようなきめ細かさがここにも欲しかったように思う。また反乱が起こる背景などが説明されないままに突然建設中のマイクロウェブ通信用の鉄塔と付属施設が砲撃されるなど、筋書きがやや飛躍が見られ、ついて行くのに注意が必要な面もある。

しかし二流企業の悲哀や大手の発注者のいじめ、現地社会の人々との交流など、エリート企業のエリート社員に焦点を当てた島耕作シリーズでは出てこない新鮮な面も少なくない。DEC社員の本多のいやみやアル・シーク社の社長の作業サボタージュの場面などはその一例だが、とにかく全体的な目線が中小企業のそれなのだ。逆に島耕作の場面にはしばしば出てきた高級住宅地や召使、日本式のレスト

ランや超高級料理店、カラオケなどはまったく登場しない。そもそもそうしたものを登場させる前提となる午後5時終了という勤務体系が存在せず、したがってアフター5なる概念が発生しないのだ。寝てもさめても作業、作業の連続なのである。あるのは現地の労働者との交流であり、紛争の処理である。現地労働者との野外〈といっても砂漠だが〉「ちゃんこなべパーティ」などは、その一種だが、「豚肉が入っているか」などと言う噴出しのせりふはご愛嬌である。その意味では余裕が生む大企業の寄生的腐朽的な不健全さは、ことヤマト建設に関する限りはない。



図3 鴨志田穰・西原理恵子『アジアパーティ』(講談社文庫、2003年)

## 4 鴨志田穰・西原理恵子の世界

### 4-1 鴨志田穰・西原理恵子の海外活動

最後に登場願うのは、鴨志田穰と西原理恵子の2人である(図3表紙参照)。2人の漫画の特徴は、彼ら自身が作者であり、同時に漫



画の主人公だということだ。自作自演なのである。鴨志田と西原は2人とも1964年生まれの同い年。写真家、漫画家という近接ジャンルの2人だが、1990年代末からアジア各地漫遊の旅を重ね、それをネタに漫画に投影させた作品を送り出している。鴨志田は残念ながら2007年3月腎臓癌で亡くなっている。2人の活動舞台はブラジルや韓国、台湾もあるが、大半はタイ、ミャンマー、ベトナムで、その多くは諸国漫遊の旅である。鴨志田はタイを皮切りにカンボジャ取材に〈むろんカメラマンとしてだが〉、そしてミャンマーで仏門修業を続ける…。旅と入っても彼らは特別綿密な旅行計画があるわけではない。しかしまったくの無計画というわけでもない。鴨志田はミャンマーで仏門に入り修行を受けているが、その入門の理由を語らせよう。「タイでの生活で、いつの間にか精神がすさみきり、何かという言い訳を見つけては酒をあおり、体も半分ポンコツになりかけていた。そんな自分にいや気がさしていても、生活の場が変わらなければ、いつもの習慣で記憶を失うまで飲まずにいられた。こりゃあこのまま俺はバカになるな、と思っていた時、ミャンマー人の友人から1通のハガキが送られてきた。『この夏、息子と一緒に仏門に入ります。よかったらカモちゃんもどうですか』まるで山にキャンプにでも行くかのような無邪気な文面の、そのミャンマー人のセンスについて笑ってしまった。すぐに受話器をつかみ、『明日すぐに行く』と連絡した」<sup>13)</sup>。

すべてがこうしたノリなのである。興味のある対象が生まれれば、即座にそれに食らいつく。そしてそれをやりぬくのだが、局面が変わればそれをやり通すわけではない。瞬間・瞬間は誠実に生きるのだが、全部を通して見ると「何か」が足りない。その足りなさを慰め、埋められるのは酒か麻薬か。結局、鴨志田は自分の肉体を痛めつけるだけ痛めつけて、自ら消滅の道を歩まざるを得なかったのである。

妻の西原理恵子は、この彼と紙上漫画で張り合うのである。地の文と漫画の相関関係は、ある時は複雑で、ある時は単純である。両者は関連があるようでない。しかし共通しているのは、犯罪半歩手前のハチャメチャなアジアとの係わり合いなのである。

#### 4-2 鴨志田穰・西原理恵子の海外生活

彼らは海外で稼いでいるわけではない。日本で蓄えた資金を使って海外での「生活」を試みて、それを糧に、日本で稼ぐという「資金循環構造」を作り出しているのである。したがって、海外生活は、先の2人のようにビジネスではない。だからといって、まったくの遊びというわけではないのだ。それは、日本国内でのビジネスの海外延長版なのである。

だからといって、厳密な計画をたてて現地との関係者と連携してことを運ぶというわけではない。前述したようにそのつど興味を持った対象へと食らいついていくのである。ある場合にはカンボジャ取材となり、他の場合にはミャンマーでの仏門体験となる…。彼らがそれを『熱血アジアパー伝』と名づける所以である。しかし他の観光客のように名所旧跡に行くのかといえば、さにあらず。逆にそれなりの情報と現地社会との連携なくしては実現できない旅をする。現地日本人と僅かながらも接触を持ち、ツテをたどって現地人社会とも連携をもつ。しかし現地の日本人というのも実はタイを始めアジア各国で浮草稼業をしている連中で、トータルに浮草稼業集団なのである。

## おわりに

以上、海外日本人を3類型に分けて、漫画を通じて彼らの生態を検討した。将来展望という視点で見ると、近年「大企業派」の数が減少し、逆にその対極にある「さすらい派」の数が増加してきているように思われる。それは、日本国内で「さすらい派」が増えてきていることと関係があるように思われる。鴨志田穰・西原理恵子の漫画シリーズが売れるというのもこうした「さすらい」願望派が一定の層をなして存在しているからであろう。しかし反面で「さすらい派」を許容できる時期は、日本もまだ健全な面を有しているが、こうした部分が消滅していくときこの「さすらい派」がいかなる変化を遂げていくのか、は注目すべきであると考ええる。

## 注

- (1) 小林英夫・柴田善雅・吉田千之輔編『戦後アジアにおける日本人団体』ゆまに書房、2008年。
- (2) 矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、1975年、124頁以下参照。
- (3) 赤木攻『『天使の都』に浮遊する日本人』『アジア遊学』No57、勉誠出版、2003年11月。
- (4) 弘兼憲史『課長島耕作』講談社 2001年、『部長島耕作』同左、2002年、『取締役島耕作』同左、2003年、『常務島耕作』同左、2003年、専務島耕作』同左、2005年。
- (5) 本宮ひろし『サラリーマン金太郎』ホーム社、1994-2002年。
- (6) 鴨志田穰・西原理恵子『アジアパー伝』講談社文庫、2003年、『どこまでもアジアパー伝』同上、『煮え煮えアジアパー伝』同上、『もっと煮え煮えアジアパー伝』同上、『最後のアジアパー伝』同上、『酔いがさめたら、うちに帰ろう』同上、西原理恵子『鳥頭紀行ぜんぶ』朝日新聞社、1998年。
- (7) 「日経流通新聞」2008年4月28日。
- (8) 小林英夫『東南アジアの日系企業』日本評論社、1991年。
- (9) 同上書、序章参照。
- (10) この点に関して詳しくは、小林英夫・丸川知雄『地域振興における自動車・同部品産業』および丸川知雄『現代中国の産業』中公新書、2007年参照。
- (11) この点に関して詳しくは 小林英夫『産業空洞化の克服』中公新書、参照。
- (12) この現象は中国一国だけの問題として考えるのは当を得ていない。むしろBRICs全体の問題として考えるべきであろう。詳しくは、小林英夫『BRICsの底力』ちくま書房、2008年参照。
- (13) 前掲『煮え煮えアジアパー伝』78頁。